

令和3年度 第1回理事会及び評議員会が開催されました
—特集— 袁 隆平(えん・りゅうへい)氏のご逝去を悼んで
「新潟市食文化創造都市推進プロジェクト 10の支援事業を決定」

2021/8/2 第40号

令和3年度 第1回理事会及び評議員会が開催されました



昨年の理事会の様子

令和3年度の第1回理事会が6月23日(水)に新潟市内ホテルイタリア軒で、同評議員会が7月19日(月)にwebにて開催され、令和2年度活動報告及び決算報告、第7回食の新潟国際賞の推薦要項、同選考委員の選任、役員に辞任に伴う役員選任などの審議が行われ、承認されました。以下ご報告いたします。

(1) 第7回食の新潟国際賞選考委員の選任

第7回食の新潟国際賞選考委員に9名が選任されました。任期は2021年9月1日から2022年11月30日です。

構成	氏名	所属・職名
委員長	唐木 英明	(公財) 食の安全・安心財団 理事長、東京大学 名誉教授
委員	赤阪 清隆	前(公財)フォーリン・プレスセンター 理事長、元国連事務次長、国連日本政府代表大使
委員	石井 勇人	(株)共同通信社 取締役、前農業ジャーナリストの会会長
委員	今野 正義	日本食糧新聞社 代表取締役会長CEO
委員	清水 誠	東京大学 名誉教授、東京農業大学 客員教授
委員	生源寺真一	福島大学食農学類 学類長 教授、東京大学 名誉教授
委員	西澤 直子	石川県立大学 学長、東京大学 名誉教授
委員	渡辺 聡	新潟県農業総合研究所 食品研究センター長
委員	伊藤 忠雄	新潟大学 名誉教授、新潟市農業活性化研究センター 名誉所長

(2) 役員に辞任に伴う新役員の選任について (役員名簿参照)

理事の今井長治氏(前新潟県農業協同組合中央会代表理事会長)及び理事の齋藤吉平氏(新潟県酒造組合顧問)の辞職を承認し、新理事として伊藤能徳氏(新潟県農業協同組合中央会代表理事会長)と大平俊治氏(新潟県酒造組合会長)の就任が承認されました。

なお、令和2年度活動報告並びに収支決算報告については財団のホームページに掲載しておりますのでご覧下さい。

また、第7回食の新潟国際賞の推薦応募要項については次号(8月中旬予定)の財団通信「第7回食の新潟国際賞 推薦応募特別号」に詳細を御知らせいたします。

一 特集一 袁 隆平(えん・りゅうへい)氏のご逝去を悼んで



袁 隆平氏
(えん・りゅうへい)
(享年91歳、元中国国家雑交水
稲作業技術センター主任:中国)

袁 隆平氏は去る2021年5月22日、中国湖南省長沙市で90歳で逝去されました。袁氏は2010年10月に「第1回食の新潟国際賞 佐野藤三郎特別賞」を受賞した中国を代表する農業研究者です。

袁氏は異種交配による品種改良でハイブリッド米の育種に成功した世界の第1人者でした。袁氏は飢えに苦しむ人々を目のあたりにし、水稲こそが人々の命を救う食糧だと考え、国家のキープロジェクトを指導し1995年にハイブリッド米の理論と技術開発に成功しました。

袁氏の開発したハイブリッド米はコメの収穫量を3倍に増やし、人口増による飢餓から中国人民を救った「ハイブリッド米の父」と呼ばれ中国国民から広く尊敬されてきました。

袁氏は農業のノーベル賞といわれる「世界食糧賞」をはじめ、世界の多くの賞を受賞するとともに、2019年には中国の国家の最高栄誉として贈られる共和国勲章を受章し、中国国民で袁氏を知らない人はいないといわれ「袁おじいさん」親しく呼ばれていました。

謹んで袁先生のご逝去を悼み心から哀悼の意を表します。

一 特別寄稿一 「袁 隆平先生のご逝去を悼んで」



新潟薬科大学 特任教授 大坪 研一
(公財) 食の新潟国際賞財団 理事
第6回食の新潟国際賞 佐野藤三郎特別賞受賞者

中国の偉大な水稲遺伝育種研究者の袁 隆平先生が2021年5月22日にご逝去されたとの報に接し、心より哀悼の意を表します。すでに食の新潟国際賞財団からは、ご子息並びに在新潟中国総領事あてに哀悼の書簡が送られたとのことでした。

袁氏は、1930年に北京に生まれ、西南農学院を卒業し、中国の米主産地の一つである湖南省の安江農学校の遺伝育種学の教師となり、当時大飢饉に苦しむ人々を救うことを目的に、稲の遺伝育種の研究を始めました。

稲の収量を高めるために、交配された雑種が両親より優れた特性を示す「雑種強勢」に注目し、1964年から規模を拡大して優良品種の育成研究を行いました。

その後、文化大革命による試験田の破壊などの苦難もありましたが、海南島にハイブリッドライス試験場を設け、1972年には重点プロジェクトの認定を受け、そのリーダーとして研究開発を指揮しました。

ハイブリッドライス(一代雑種イネ)は、通常の品種と比較して15~30%の収量増が期待され、その栽培面積は、2016年で、中国では58%、世界全体では13%を占めています(鳥山欣哉)。ハイブリッドライスの育種には、ミトコンドリアが原因で花粉が死ぬ雄性不稔系統と花粉発育を正常化させる稔性回復系統が使われます。

袁先生は、1973年には収量が20%も増加する「南優2号」などの3種類の優良ハイブリッドライスの開発に成功し、翌74年には、「南優2号」の量産化に成功しました。1995年にはハイブリッドライスの開発技術を確立して中国工程院院士(中国における工学・技術科学分野における最高位の称号)となりました。

1996年には中国農業部が「中国スーパー水稲育種プロジェクト」を設立し、袁院士がそのリーダーとなりました。その成果により、中国における水稲の収量は飛躍に増加し、中国の食糧問題の解決に大きく貢献したのみならず、ハイブリッドライスはアフリカ、東南アジア、南米などにも広がり、「第2の緑の革命」と称賛されました。

2004年末までに、スーパー水稲の新品種は、四川、福建、湖南、安徽、遼寧、浙江などの水稲の主要生産地域ですでに1072万haで栽培され、92万トンを増産し、農民の利益は130億元増加したと報告されています。その後、袁院士は、FAOの首席顧問に任じられ、袁院士を長とする中国のハイブリッド水稲の専門家たちは、ベトナム、ミャンマー、インド、フィリピン、バングラデシュ、スリランカ、パキスタン、ブラジル、ブルネイなどの国々へ何回も赴き、ハイブリッド水稲の指導と援助に行いました。

ハイブリッド米は現在、インドやベトナム、米国、ブラジル、アフリカなどで大規模栽培されており、1ヘクタール当たりの生産量は現地の優良品種よりも約2トン多いとされています。

また、袁氏は過去数十年にわたり、80余りの発展途上国のために1万4000人余りのハイブリッド米技術人材を育成してきました。

一 特集一 袁 隆平(えん・りゅうへい)氏のご逝去を悼んで

若い頃に飢餓を目撃して農業の研究に没頭しようと決心した同氏は、10年以上、アフリカの国々がハイブリッド米を育てる手助けをし、米の生産力を引き出すため何十年もたゆまぬ努力をしてきました。

袁院士のこれらの大きな業績に対し、1981年に中華人民共和国国家科学技術委員会の国家特等発明賞、1987年に国連教育科学文化機関科学賞、1995年に国連食糧農業機関（FAO）の食糧安全保障貢献賞、以下、日経アジア賞（1996年）、世界農業賞（2004年）、イスラエルのウルフ賞（2004年）、中国の共和国勲章（2019年）など、国内外から多くの賞が贈られました。

2010年食の新潟国際賞財団の第1回食の新潟国際賞の佐野藤三郎特別賞を授賞しました。

1999年に、小惑星8117は「袁隆平星」と命名されました。

さらに、袁院士は、米国科学アカデミーの会員となり、2019年には、中国の「最も美しい科学技術工作者」にも選ばれました。

袁院士は、ご高齢にも関わらず、最近まで湖南省長沙の中国国家ハイブリッドライス工程技术研究センター主任を務め、海南島の育種研究所も毎年訪れていたそうです。

2017年には、青島市に海水稲研究発展センターが設立され、袁隆平院士が中心となり、海水稲技術の開発に専念することとなりました。

「海水稲」は中国の育種専門家がハイブリッド育種技術と通常の育種方法を使い栽培する新型塩・アルカリ耐性稲であり、海南省南繁基地にある1000件以上の海水稲サンプルの中から、すでに176件の優良品種が選出されており、2018年にも全国の広い範囲で試験栽培が始まりました。

中国の約1億ヘクタールのアルカリ性土壌は全国各地に分布しており、気候帯や日照条件などが異なります。

2018年に初めて全国5ヶ所の主要累計アルカリ性土壌で試験を行い、異なる地質条件の下で、この176件の海水稲サンプルの最終生産量と品質を検証していくことになりました。

袁隆平氏のチームは2014年に「海稲86」の改良に参加し、同センターを設立しました。大まかな淡水化処理が施された海水灌漑の水田で試験を行い、段階的に成果を挙げ、海水稲試験栽培の生産量は、2016年に0.06ヘクタール当たり500キログラムを突破し、2017年10月には最高621キログラムに達しました。

同センターは塩・アルカリ耐性稲の育種及び塩・アルカリ土地での稲作改良の研究、第3世代遺伝プロジェクト不育系ハイブリッド稲技術、コメ品質・うま味研究という3つの研究開発方針を設定しています。

青島海水稲研究開発センターの袁隆平氏の「海水稲」チームは、2018年に、ドバイでプロジェクトの建設を開始しました。

海水稲を含む80種以上の稲を試験栽培し、国際稲研究所（IRRI）、インド、エジプト、アラブ首長国連邦（UAE）、中国の専門家5人による国際生産量測定専門家チームは、成熟した第1陣の品種の生産量が、世界の稲の平均生産量である1ヘクタールあたり4.539トンを上回ることを確認しました。

これは、袁氏の海水稲チームのドバイ砂漠地帯における試験栽培が段階的な成功を手にしたことを意味しています。

私は2018年に中国青島海水稲研究センターに招かれて米の食味に関する講演をする機会を得ました。

袁院士は、当事88歳というご高齢でしたが、力強い講演をされ、新しい分野への挑戦に意欲を表明されました。周囲の皆さんの袁院士への敬意の表し方からも、如何に袁院士が尊敬を集めているか推察されました。

袁先生のハイブリッドライス開発のご業績が世界中に普及して食糧問題の解決に大きく貢献され、さらに海水稲などの新分野にも応用が期待されている現在、袁先生のご逝去されたことは誠に痛恨の極みと言えます。

袁 隆平先生のご逝去の報に接し、袁先生のこれまでの偉大なご業績を称えるとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



第1回授賞式の様子（2010年10月）



袁 定陽 氏
（袁隆平氏の代理としてご子息が出席）

—特集— 袁隆平(えん・りゅうへい)氏のご逝去を悼んで

—特別寄稿— 「袁 隆平先生のご逝去を悼んで」

中華人民共和国駐新潟総領事館
総領事 孫 大剛



2021年5月22日、「ハイブリッド稲の父」であり、「共和国勲章」受賞者である中国工程院院士の袁隆平が湖南省長沙で逝去されました。享年91歳。彼の逝去は中国の国内外で広く注目され、各地の人々は彼に哀悼の念を寄せました。

袁隆平院士は、中国そして世界の食糧問題の解決に多大なる貢献をしました。彼は1964年からハイブリッド稲の研究を始め、世界初となる実用的な高収穫のハイブリッド稲の品種を開発し、その後数十年にわたり改良を重ねました。現在、中国のハイブリッド稲の年間植栽面積は1600万ヘクタールを超え、毎年増産している糧食のみで8000万人もの人々を養えます。中国は世界の約9%の耕地を使い世界の20%近くもの人口を養い、1949年（中華人民共和国成立の年）に5億人が「腹いっぱい食べられない」状態から現在の14億人が「満腹に食べられる」という状態まで向上させ、また今年7月1日の中国共産党100周年に際し小康社会（ややゆとりのある社会）の全面的建設を宣言しました。これらの成果に袁隆平院士の功績もあると思われま

す。袁隆平院士の貢献は中国にとどまらず世界にまで及びました。彼とそのチームは80以上の発展途上国で、1.4万人ものハイブリッド稲の技術者に技術指導しました。40年あまりで中国のハイブリッド稲はすでにアジア、アフリカ、アメリカ大陸の数十の国と地域で植栽され、作付け面積は800万ヘクタールとなりました。近年、袁隆平院士は海水稲の試験栽培を重視しており、2018年にはアラブ首長国連邦で世界初となる砂漠地帯での作付けに成功しました。2021年、彼のチームは8年から10年かけて、海水稲の作付けによっておよそ670万ヘクタールのアルカリ性土壌を改造する目標を宣言しました。しかし残念ながらこの事業が達成されるというところで、袁隆平院士がその目でその実現を見ることができなくなってしまいました。



袁隆平院士は国際的な名誉と無数の賞を受賞しました。2010年10月には食の新潟国際食品賞財団から「佐野藤三郎特別賞」を授与され新潟と特別な縁を結びました。佐野藤三郎様は幾度も中国に赴き、黒竜江省の三江平原の開発と龍頭橋ダムの建設に貢献されました。袁隆平院士が受賞したこの「佐野藤三郎」の名を冠した賞に中日両国民の友好と農業交流と協力が深まることへの期待が現れております。



2022年、中日両国は国交正常化50年を迎えます。これを機に食の新潟国際食品賞財団を含む中日各界の友好団体及び有識者の方々がともに袁隆平院士や佐野藤三郎様などの先行者の遺志を継承し、農業などの分野における国際協力を推し進め、中日友好交流に絶えず新しい貢献をされることを期待しております。

「新潟市食文化創造都市推進プロジェクト 10の支援事業を決定」

食の新潟国際賞財団が業務受託している、新潟市が推進する「新潟市食文化創造都市推進プロジェクト支援事業」をご紹介します。

この事業は、新潟市の食や食文化を活用して異業種と連携し、地域の活力づくりや産業の振興に寄与する、市民の有望な取組を支援するものです。今年度の事業に応募した人たちのプレゼンテーションが5月25日(火)に行われ10件が選ばれました。

募集するプロジェクトは「新潟市の食材を活用したオリジナルメニューの開発や六次産業化」、「新潟市ならではの食文化、歴史、未来を考える企画」、「食による交流人口の拡大を図るもの」、そして「ガストロノミーツーリズムを推進するための情報発信や人材育成、ツアー企画」等です。

審査会では、一次審査を通過した申請者12組が、質疑応答を含め20分でプレゼンテーションを行い、新潟市農林水産部の二神健次郎部長をはじめ7名の審査委員の質問に答え、審査の結果10件が決定しました。選ばれたのは、新型コロナウイルスの感染防止に配慮して、秋の新潟の味覚を体験するツアーにキッチンカーを同行させるもの。大学生を対象に農業と食の体験ツアーを実施し、その動画をもとに首都圏の大学生も含めてオンラインセミナーを行うなど、オンラインを活用したりする企画が目立ちました。また、小学生が考えるお子様ランチで食と地域の活性化を図り、コロナ禍でも明るさを見出して行こうという前向きな企画が選ばれました。

選ばれたプロジェクトは、今年度中に実行され報告書の提出により新潟市から助成金の支援が受けられます。食の新潟国際賞財団はこの事業の運営業務を新潟市から業務受託しており、新潟市の食文化のさらなる創造と推進につなげるため、今後の事業の実施状況を確認していきます。



○2021年度 食文化創造都市推進プロジェクト支援事業 採択事業一覧 (順不同)

1	野菜ソムリエと行く！ 採れたて野菜でお料理教室バスツアー	株式会社フリーウェイツアー 代表 小林 裕一	野菜ソムリエ同行、農園や直売所等での収穫体験と収穫した野菜を使用した料理教室付きガストロノミーツアーの実施。
2	たねをまく 量り売りマーケット+商品開発+ネットワークを育てるプロジェクト	株式会社リトルライトストア 代表 豊島 淳子	量り売りマーケットとオンラインまたは招聘による勉強会の開催および「レモングラス」を使った商品開発。
3	親子で食育活動大作戦！	料亭 三笠屋 代表 本間 丈晴	親子を中心に、老舗料亭の見学、農水産品の目利き、魚料理をきれいに食べる活動、地産地消ランチメニューの提供。希望者には柿収穫体験と生産者訪問。
4	次世代型ガストロノミーツーリズム	Yuifarm project 代表 大越 正章	次世代型ガストロノミーツーリズム事業のトライアルとして、 ・大学生へのオンラインセミナーの実施。 ・体験ツアーの開催とその様子を動画編集しPR動画として配信。
5	キッチンカーを連れて旅をする ～新潟秋のガストロノミーツーリズム～	株式会社e-table 代表 松井 弘恵	新潟の旬の食材を味わう、キッチンカーとともに生産者を巡るバスツアーを9月～11月に開催。収穫体験とその場で調理した料理の提供。
6	～なつかしいけど新しい～動画で旅する新潟 土産&商店街	株式会社ニール 代表 中澤 真理子	・新潟市を代表する土産3品の製造工程・歴史背景・作り手の思いを伝える動画と本町通・古町通・東堀通をバーチャルショッピングする動画を作成・公開し通販サイトと連動させ「新潟発R」の誌面でも紹介し、購読や来訪へつなげる。
7	本町サワーで本町を盛り上げよう！	本町サワー実行委員会 代表 山田 直隆	・本町に店舗をもつ飲食店が独自で考えた「本町サワー」を提供し名物のひとつとする。 ・本町サワーマップを作成し本町はしご酒等のイベント開催。
8	本町お子様ランチ	#きーぼう do. 代表 近藤 希以子	小学生を対象としたお子様ランチ開発プロジェクト。本町の町探検とお子様ランチメニューの考案。考案メニューは子供たちが店員となり本町(#きーぼうdo.)にて提供。
9	アフリカからにいがたへ コメ食文化を通じた国際交流	アフリカンベーカリーカフェ ナミテテ 代表 工藤 知子	・新潟大学のアフリカからの留学生を講師に招き、アフリカ文化紹介とパン作り講座の開催とスタッフの技術指導。 ・アフリカに広く伝わる米粉を使用したパン、菓子類を紹介しナミテテにて販売。
10	ミシュランガイド新潟2020特別版と巡る・新潟食文化と食材の旅プロジェクト	Yuifarm project 代表 大越 正章	・ミシュランガイド新潟版2020掲載シェフを数人取材 ・対談したものを動画で流し、推進会議員や学生と共有することで食文化の浸透を図る。 ・オンライン上で地域外のミシュラン掲載店シェフとの交流。

特別会員

亀田製菓(株)	(株)ブルボン	(学)新潟総合学園
一正蒲鉾(株)	サトウ食品(株)	新潟県農業協同組合中央会
(株)第四北越銀行	(株)栗山米菓	亀田郷土地改良区
(株)新潟日報社	(株)新宣	(株)エイケイ
亀田商工会議所	(株)新潟クボタ	NST新潟総合テレビ
にいがた22の会	(株)日本食糧新聞社	五十嵐建設工業(株)

正会員

新潟市農業協同組合	ホテル日航新潟	麒麟山酒造(株)
新潟県信用組合	(株)ニッポン関東支店	(株)加島屋
(株)第一印刷所	日本甜菜製糖(株)	(株)日本フードリンク
(株)本間組	(株)鳥梅	(株)ディモルギア
石本酒造(株)	新潟工科大学産学交流会	UX新潟テレビ21
(株)ミカサ	(株)キタック	イカリ消毒(株)
神山物産(株)	北越工業(株)	新潟工科大学
ハセガワ化成工業(株)	丸榮製粉(株)	(株)日本旅行新潟支店
藤屋段ボール(株)	鍋林(株)ヘルスフーズ事業部	(株)田中組
(株)タケショー	TeNYテレビ新潟放送網	(医)愛仁会 亀田第一病院
(株)新潟博報堂	(株)栗田工務店	(株)ひらせいホームセンター
BSN新潟放送	三和薬品(株)	ワタキューセイモア(株) 新潟営業所
新潟陸運(株)	松田産業(株)	(株)エヌエスアイ
(株)新潟食品運輸	セツソカートン(株)新潟工場	(株)トップライズ
月島食品工業(株)	東邦産業(株)	

個人会員

古泉 肇	藤島 安之	和田 充彦	高畑 昭文	廣瀬 利雄	山口 勉	木村 真教	君塚 毅
宗像 寛明	高橋 常考	田村 敏郎	杉本 克己	近藤 鴻	佐藤 珠美	大坪 守	大川 秀雄
大倉 正寿	吉岡 謙一	古口 日出男	坂田 武利	門脇 基二	佐藤 久栄	大谷 勝男	田中 敏明
青木 清	阿部 徳威	佐藤 勉	佐藤 清一	野上 文彰	板井 茂	浅井 善広	清水 良一
田中 作一	新保 房機	古泉 榮三	今泉 昇	佐藤 純	倉嶋 則昭	塚本 太一	大越 斎
野口 正晴	酒井 定勝	加藤 洋介	齋藤 秀明	松本 裕志	當野 篤	高山 利夫	久保田 紳一
河瀬 三千夫	和澄 孝男	五十嵐 修	望月 健三郎	山田 雄治	鈴木 正二	竹石 松次	古泉 幸代
大森 ゆかり	高橋 慶三	阿部 昭一	渡邊 信也	丸山 美由紀	井浦 康晴	宇野 勝雄	赤塚 義廣
坂井 俊一	鈴木 伸作	佐藤 銀治郎	加藤 寿一	石附 由美子	齋藤 博文	齋藤 幸広	田辺 俊文
小田 静二	渡邊 徹	中村 好彦	栗田 浩	栗田 朋子	阿部 文仁	高尾 茂典	五十嵐 豊
久代 勝英	古泉 幸一	加藤 純子	松島 謙介	高倉 広利	清水 泰成	中野 節子	阿部 愛子
大島 照美子	宮口 澄子	青木 太華子	五十嵐 康子	五十嵐 早苗	佐藤 金治郎	佐藤 文男	高橋 征男
高橋 克郎	田中 洋介	田村 泰生	山崎 尉生	中村 雪絵	村山 浩太郎	稲葉 晋	川崎 千春
秋山 正之	松川 忠史	濱野 剛	山根 憲介	池田 祥護	星野 幸三	糸満 盛人	伊豆 智
小林 哲也	井東 昌樹	遠山 幸男	小野 隆樹	大橋 祐貴	前田 穰	桐原 隆晃	長井 基樹
岸田 良満	樋熊 隆治	小林 宏志	柳澤 敏郎	田中 一幸	遠藤 俊介	葉葺 正幸	星野 聡
高崎 三男	桑原 毅	大日方 聡	石田 道子	須貝 貴之	宮下 好文	中村 祐一	田中 雅史
藤間 佑輔	品田 卓也	渋谷 政道	村山 雄亮	北爪 文義	近藤 正	高橋 佑	荒井 弘美
重泉 篤史	本間 康弘	降旗 亮太	中野 克之	国松 豊	最上 正人	森本 昌章	佐藤 正尚
下條 幸二	廣川 正通	小谷 尚志	高橋 道映	田中 弼	尾崎 清美	佐藤 浩晃	村山 和恵
小林 達	佐藤 善昭	酒井 栄一郎	佐藤 聡	小林 守	阿部 欣也	杉谷 浩一	佐々木 一
金田 季之	宮島 泰	高崎 俊哉	高橋 裕作	小平 勝志	齋藤 文彦	藤田 正明	池田 一史
石崎 宏幸	小嶋 孝代	田村 和男	渡邊 雄一郎	駒形 正明	藤井 大三郎		